

---

# カタナの話

なんがー

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

カタナの話

### 【Nコード】

N5661B

### 【作者名】

なんがー

### 【あらすじ】

とある一振りの名刀があった。その名刀を所持する家には次々と不幸が降りかかるのだが。

世に刀と称するものは多々あれど、徳川家に仇なす妖刀「村正」むらましのはつとに有名でございます。

ものの本によりますれば、かの東照大権現・徳川家康公のお祖父様である清康公、お父上の広忠公、共に村正作の刀持つ家臣の謀反によって落命いたしております。

さらに家康公のご嫡男・信康公が謀反の疑いをかけられて泣く泣く自刃なされた際、介錯に使われてその首をスツパリと刎はねる役目を担った刀もまた村正。

ここまで来たらばさすがに気味が悪い。家康公はじめ徳川家は村正を「当家に仇なす妖刀じゃ」と恐れ嫌ったとのこと……。

さて、これからお話いたしますのは徳川家とは何の関係もございませなんだが、不思議なカタナがある一族に災いをもたらしたるお話。

昔昔の大昔、今日の東京かつては江戸と呼ばれておりました都に、波名山五郎左衛門はなみやまごろうざゑもんというお侍が住んでおりました。

この五郎左衛門はなかなかどうして優れた剣の達人で、「江戸市

中にこの者より優れたる者無し」と皆に言われるほどの腕前。

おまけに素晴らしい大力を持ち合わせており、まさに武芸においては右に出るものの無き武士ものぶにございました。

しかし悲しいかな、五郎左衛門はそうした褒め言葉を最初のうちは大層誇りにしており、また、謙虚になっていたものですが、毎日のように名声を耳にする次第次第に「誇り」は「驕りおこ」へとムクムクと形を変えていったのでございます。

さて、並ぶもの無き剣の達人である五郎左衛門は、これまた並ぶもの無き一振りの名刀を佩はいておりました。どうやら仕えていた本岡某おなにかしという主君から拝領したものといたします。

今日ではその名前は伝わってはおりませんが、聞き及びますところでは、相手の刀と刃を触れればスッパリと相手の刃を切り裂いてしまうほどの切れ足だったとか……。

そのような素晴らしい刀を佩いているという事実は、驕った五郎左衛門の心をさらに煽り立てました。

「拙者はこんな素晴らしい刀を持っている」

「使わなければ損というもの」……。

ああ、人一人の転落とは真にあつという間にございます。

ついに江戸市中一の剣士であった五郎左衛門は、夜な夜な道端で人を切つては刀の切れ味を試す辻斬りに墮してしまつたのです。

ある時は侍を、ある時は逢引にきていた若い女を、ある時は按摩あんまのじいさんを、五郎左衛門は次々と切り伏せてはケタケタと妖怪のように笑つたものです。

。しかれども古いにしえの賢人は言いました。「天網恢恢てんもうかいがいにしてもらさず」

五郎左衛門の凶行にも、ついに天罰の下るときがやってきたのです。

何者かが「五郎左衛門が夜な夜な人を切り殺している」と密告いたしました。

ある夜、五郎左衛門がいつものように辻斬りに出ると、同心達が彼を待ち構えているではありませんか。

仰天した五郎左衛門は逃げ出しました。そうして逃げて逃げて、ついに足が動かなく動かなくなつてその場に座り込んでしまいました。

しかれどもすぐ近くには追手が迫っている。もはやこれまでと諦めた五郎左衛門は、自慢の名刀で自らの首を刎ねたとの事……。

さて、時代は流れて大正の頃。山村泰蔵やまむらいたいぞうという士族だという男が東京に住んでおりました。

どういった経緯かは寡聞にして存じてはおりませんが、波名山五郎左衛門の所持していた名刀が、大正の時代にあつて彼の者の家に伝わっております。

泰蔵の祖父のその前の前の……代から伝わっている本岡某の所有していたという由緒正しい刀として、山村家では大変にこの刀を大事にしていたのです。

その様子たるや、普段は布を巻いた後に桐の箱に入れて蔵の中に保管して、その時々の家長の許しを得なければ刀身を鞘から引き抜くことは愚か、箱を開けたり触れたりすることすら許されないといい有様でした。が、波名山五郎左衛門がこれで人を斬りまくったという事実は知らなかった様子。

山村家においてそれほど大事にされていた波名山五郎左衛門の名刀。ですが、刀とは本来人を斬る物、殺す物。やはりこの刀も五郎左衛門の手を離れて後、山村家の人を殺めてまいりましたものでございませぬ。

そんな悲惨な出来事が待っているとはつゆ知らず、山本家の人々は今日も今日とて刀を蔵にしまい込んでありがたがっていたのです。

事の発端は山村泰蔵の祖父・国由くによしでありました。彼は平静とても温厚で、あまり怒ることのない人物だったとの事ですが、その日はかりはいつもと様子が異なりました。

曰く、一日中蔵の中にこもってゴソゴソと何事かをやっている様子。

不思議がった家人が

「おじいさん……」

と呼ぶや、何と国村は左手に鞘、右手に刀。刀身がギラギラと光っており、まるで猛獣か化け物の瞳の如く家人の姿を射抜いていたのでございます。彼は蔵の中に封印されていた五郎左衛門の刀を持ち出そうとしていたのです。

国村は家人の姿を認めると蔵から飛び出して、右手の刀を振り上げて家人に切りかかろうとします。

刀を右から振られれば左に避け、左に避けれ右から振り……そうした具合に国村と家人は数分の間に渡って家中を走り回り、世にも怖ろしい追いかっつこを繰り返しておりました。

そうしている内に、家族もこの異変に気が付いて続々と集まってきました。国村の異様な姿を見て仰天した家族は国村をpushさえ付けようとしましたが、逆に刀で斬り付けられて流血するという有様。

何と国村これで正気に戻ったのか、突然ハツとして両手をブルブルと戦慄わななかせ、刀で己の首を切り裂いてしまったと……。

急いで病院に担ぎ込まれた国村でございましたが既に手遅れ、そのまま絶命してしまいました。

死ぬまでの間に「刀を汚してしまった」とうわ言のように繰り返していたとの事。そしていまわの際きわに「わしの血で汚れてしまったが、あの刀は山村家の家宝だから今後も大事にしてくれ」と言い残していたとか……

国村が突然暴れだした原因はよくは分かりません。しかし、いつの間にもやら老齡のために精神の錯乱を起こしたのだらうと言われるようになっていました。

例の刀はまた元の山村家の蔵へ。その由緒については誰も不思議に思わぬまま……。

山村国由が精神を錯乱させて……とにもかくにもそういう事になって、波名山五郎左衛門の刀を片手に暴れまわってから6、7年ほど後のこと。

泰蔵の父・邦夫くにおは、「売ればある程度の金が手に入るだろう」と、蔵に保管してある刀を売り払ってしまおうと考えておりました。

それというのも山村家の財政が次第に傾きかけ、台所事情が逼迫ひっぱくしてきたというのが理由なのでした。

邦夫は息子で、泰蔵の兄である安蔵やすぞうを伴って町の古物商まで刀を売りに行くことと相成りました。

邦夫は蔵から刀を持ち出して、居間の真ん中で鞘から引き抜きためつすがめつしておりますと息子の安蔵が。

「父さん、何でそんなにその刀を眺めているんです」

「ああ、いよいよこの刀ともお別れだと思つと、何だか寂しいような気になつてな……」

「そうですか……。私は先に準備していますよ」

安蔵、そう言つと玄関で靴を履き始めます。この時、家の中にはこの二人以外だれもおりません。邦夫の妻は買い物へ出かけ、まだ幼かった弟の泰蔵は遊びに出ているのです。

さて、玄関の安蔵は待てども待てども父が来ないことに苛立ちを感じ始めておりました。一体何をやっているのかしら。

そう思った安蔵は、居間にいるはずの父の様子を見に行きました。

「父さん……」

「早くしてください。何をやってるんですか」

そこで安蔵はツイ今しがたまで刀を眺めていた父の背中から、細長い鉄の塊が生えているのを目にいたしました。

それはさっきまで父が手にしていたあの刀で、どうやら安蔵が玄関で準備をしている間に父である邦夫は、その刀で腹を突き刺して絶命しているようでありました。

そして傍らには、以前からしたためていたのでしょうか、遺書が……。

「俺はこの家の財政を傾かせてしまった。家長としての責任を取ってここで自殺する。刀は我が家の家宝だから、手放さずに何とかやっていってくれ」

大体こんな内容の遺書を残して、邦夫は自ら命を絶ったのでございました。

かつて波名山五郎左衛門の手の中で幾多の人々の血を吸った刀は、今度は邦夫の血を浴びてぬらぬらと光り輝いております……。

それからさらに10年の後。今度は邦夫の長男で、泰蔵の兄である安蔵が命を落としました。交通事故でございます。

刀とは関係が無いと思われるかもしれませんが、事の次第はこう

なのです。

邦夫の死後に山村家の財政はある程度持ち直しましたが、その後にもまたどんどんと落ち込んでしまいました。

新たな家長となっていた安蔵は父の遺書に書かれていた事の通りに、刀には手を出さぬままに何とか家を盛り返そうとしましたもののついには失敗して、また元の通りの逼迫した財政に陥ってしまったのです。

安蔵は刀を売ろうと考えました。父の遺言は守らねばならぬ。だけれども家の財政を何とかせねばならぬ。

1ヶ月ほど考えあぐねた挙句、安蔵はついに刀を売ってしまう決心をしたのでございます。

売り払うために蔵から刀を持ち出して家を出た安蔵は、目的とする店を目指して出発いたしました。

刀をそのまま持ち歩いていては周りに怪しまれますものだから、蔵の中にあつた通りの桐の箱に入れた姿で、まるで赤ん坊でも抱くかのように大事そうに腕の中に包んでいました。

## カタナの話

15分ほど歩いた時でありました。突然後ろから耳をつんざく轟音が響き渡り、安蔵の方に近づいて来るではありませんか！

その暴走した白いトラックから発せられる轟音は瞬く間に安蔵に覆いかぶさり、次いでトラック本体が安蔵に襲い掛かりました。

安蔵の体はグシャリと潰れ、あっという間に命を散らせてしまったのです。彼が抱いていた桐の箱と共に……。

しかれどもどういふ訳でありましょう。刀が納められている箱は跡形も無くグツシャリと潰れたにも関わらず、中の刀には鞘にも柄にも、もちろん刀身にも傷一つ付いてはいなかったのです。

こうして波名山五郎左衛門の刀は三度<sup>みたひ</sup>、山村家に戻って来たのであります……。

それからさらに数年の後、山村家の男が3人も刀で死んだことにより、悪名はその界限に広がり放題となっておりました。さらには「山村サンとこの家はご先祖様が何かやらかしたんだ。きつとその祟りだ」との悪意ある噂まで囁かれる始末。

その噂を何度も耳にして心痛めた山村泰蔵は自室に籠って額に皺を寄せ、脂汗を流して一生懸命思索しております。

……祖父も父も兄も皆、家宝の刀のために命を落としている……。

……このまま捨て置いてはあの刀、これからも山村家に災いを呼び込むかも知れぬ……。

……売ろうとした兄は事故に遭って死んだ……。

……ならば壊すしかないのだろうか……。

……だがそれでは、今度はこの俺に災いがもたらされるのかも知れぬ……。

……壊すべきか、壊さざるべきか……。

数日間考え抜いた挙句、泰蔵はやはりあの刀を壊してしまうことを決めてしまったのです。

時は大正12年8月1日の夕暮れ、泰蔵は黄色い夕暮れの光の矢を背中一杯に浴びながら歩き出しました。

そうして蔵から、恐ろしさのあまりもはや箱に入れられる事もなくなつた例の刀を持ち出して庭に出、柄をむんずと握り締め、一気に鞘から引き抜きました。

かつて祖父と父の血を浴びて妖しく光り輝いた刀身が、今度は泰蔵の手の中で夕暮れの光を反射しながら、美しく輝いております。

泰蔵は数分その刀を見つめていたかと思うと、覚悟を決めてそばにあった大きな石を目がけて「エイヤツ」と振り下ろしてしまいました。

石にぶち当たった刀身は中ほどから真っ二つに折れ、折れた方のその切っ先が地面に突き刺さります。かつての名刀ぶりもこうなっ  
てしまつては形無し。山村家に災いを及ぼしたるその姿形は、跡形も無く消え去つてしまいました。

初めのうちは、泰蔵も内心はビクビクとしていました。

何せ祖父・父・兄の命を奪った刀を自らの手で叩き折ってしまったのですから、今度は自分が刀に祟られやしないだろうかと不安だったのでございます。

けれども、そうした心配は杞憂に終わりました。

3日経ち、1週間が経ち、2週間が経つても泰蔵の身には何事の異変も起こりません。

「やはり刀のせいなどではなかったんだ。きっと皆偶然の産物だったのだ」3週間が経とうとしている頃には泰蔵はそう思うようになり、次第に彼の記憶からはこの刀のことは忘れ去られようとしてい  
ました。

泰蔵が刀を壊してから一カ月後の大正12年9月1日。

その日泰蔵は午前から自室で、何がしかの手紙であったのでしようか、書き物をしておりました。

ちよつと休憩しようと思つた彼がチラと壁にかかつた時計を見てみると、午前11時52分。

「もうすぐ昼だから早く書き上げてしまわねば」

泰蔵はそう思つてすぐに机に向き直り、またペンを握つて紙に文字を走らせました。

あと少して書き上げようかという時、時計の針が指していたのは「午前11時58分」。

一生懸命に手を動かしていた泰蔵は、何だか自分が揺れているよ  
うな感じがして、驚いて辺りを見回してみると、そこらにある棚や  
ら箆<sup>タンス</sup>箆やらまでもグラグラと揺れているではありませんか。

「これは……地震だッ！」

揺れているのは自分ではなくて地面だと理解した瞬間、彼の頭は途端に混乱してぐちゃぐちゃになりました。

一体どうすればいいのか分からずにその場に呆然と座り込んだままになっていると。

すぐ左手に置いてある大きな棚がグラリグラリと踊り始め。

まるで猛獣でもあるかのように泰蔵に襲い掛かり。

哀れ泰蔵は、棚の下敷きとなって命を落としてしまいました。

泰蔵が死する原因となった地震は、いわゆる「関東大震災」とか申すものであったそうです。

死者・行方不明者は10万5千余人という目を覆いたくなるような大惨事。

ところで、泰蔵を押しつぶした棚には片仮名で「カ」と刻まれておりました。これはこの棚を売った「嘉山屋」とかいう商家の屋号だそうです。

ということは、「カ」と刻まれた棚で「カ棚」<sup>カタナ</sup>。

つまりは「カタナ」……。

真まことにおかしな話ではございますが、波名山五郎左衛門の刀を壊した山村泰蔵は「刃物であるカタナ」で命を落とすような事はありませんでしたが、「カと刻まれた柵」であるカタナ」で命を落とす結果と相成ったのでございます。

だけれども、彼は確かに「カタナ」という言葉の刃にかかって死んでいったものでした。

何だかつまらない駄洒落だじゃれのようなお話。

だけれども確かにあったお話。で、ございます。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5661b/>

---

カタナの話

2008年11月7日08時21分発行